

ロータリーの歴史

第3回「ロータリー奉仕理念の歴史」

1900年当時、アメリカでは雨後の竹の子のように数多くの社交クラブが生まれ、そしてまた消えていきました。そのような中で、100年を経て今日まで生き延びることができたクラブ組織は極めてまれであり、中でもロータリークラブ（ライオンズクラブ、キワニスクラブなども含めて）をはじめとする、所謂サービス（奉仕）クラブだけが、現在でも人々の高い評価を得ながら発展を続けています。

今回はその理由を考えながら、ロータリーの奉仕理念の歴史を振り返りたいと思います。

先に結論を述べてしまえば、これら生き延びたクラブの共通の特徴は、利他へのサービス（奉仕）ということに、尽きるのではないかと私は考えています。自分たちの仲間のためだけに存在するようなグループは、例えどのような組織であっても、所詮利己的な組織であり、世の中の評価を得て長く続くことはできないと思うことだろうと思います。そこには、人類の普遍的な理念、利他の心、サービス（奉仕）哲学と言ったものがなければならないのだと思います。

歴史に『もしも』はありませんが、もしもロータリークラブが、当初の掲げた会員の相互扶助と親睦のみを目的とした社交クラブの域に留まっていたとしたら、きっとその寿命は短命に終わっていたかも知れません。

また、もしも1906年にドナルド・カーターが、対社会的奉仕活動という概念を提唱しなかったら、1908年にアーサー・シェルドンが入会し、Service（サービス）という概念を提唱しなかったとしたら、更に1923年にウイリアム・メーニャやポール・ウエストバークが、決議23-34によってサービス（奉仕）理念の定義を確立させなかったとしたら、今日のロータリーは存在しなかったことでしょう。

ロータリークラブの存在目的を、利己を目的とする親睦や相互扶助から、他人の事を思い遣り他人のために尽くす奉仕に転換させたことが、ロータリーの発展

に繋がったのです。

さらに、ロータリー運動がただ一人の指導者の発想に捉われることなく、毎年指導者が交替し、革新を続けるという斬新な運営方法を採用したことも、ロータリーが発展した大きな要因の一つではなかったのかと考えています。

つまり、ロータリー運動の理念構築を、最初に一人のスーパーマンがすべてを決めて、それを現在まで営々と守ってきたわけではなく、その時々次々と卓越したロータリアンが現れ、組織の理念を発展構築して行ったことが、特筆すべき点ではないかと考えています。そしてその過程は現在においても、まだ続いているのかもしれませんが、ちょうど、バルセロナの有名な寺院、サグラダ・ファミリアのように。

さて今回は、2710地区 諏訪昭登PDG（広島西）がまとめられた歴史資料を引用し、ロータリーの一番大切な基本原理であるサービス（奉仕）理念の変遷を辿ってみましょう。

● “Ideal of Service”の真意解明のための歴史的考察 — ロータリー発祥の地アメリカからの考察 —

ロータリーで最も重要な言葉である “Ideal of Service”（奉仕の理念〈理想〉）の真意は、歴史的考察なくして解明できない。歴史考察の4W = When、Where、Who、What を念頭に。

- ・1905年、ポール・ハリスは3人の仲間と共にロータリーを創立（シカゴRC）。親睦と職業上の相互扶助を目的として始まった。
- ・1906年、クラブの目的に、そこに社会への貢献が加わった（ドナルド・カーターの進言による）。
- ・1907年、カーターの進言により、社会への奉仕活動としてシカゴ市内2カ所に公衆トイレを設置（1909年完成）。
- ・1908年、P.ハリスが三代目会長であった時、A.フ

レデリック・シェルドンとチェスリー・ペリーが入会。シェルドンは、business（商売、経営）はservice（サービス）の科学であるから、職業人の集まりであるロータリーの哲学は、serviceの哲学であるべきだと強調。ハリスはこれに大いに賛同して、シェルドンをPublicity and Extension Committee委員長に任命し、シェルドンの考えをロータリーの宣伝と拡大のために急進的に推進したが、一部会員の反感を買い、親睦派と奉仕派との対立を惹起してハリスとシェルドンは年度途中で辞任した。

- ・1910年（第1回シカゴ大会）、ハリス、シェルドン、ペリーは、シカゴRCでの推進を断念し、全米RC連合会（National Association of Rotary Clubs of America）を組織した（ハリス会長、ペリー事務総長、シェルドンBusiness Method Committee委員長）。

シェルドンは祝宴の中で、businessの科学はhuman serviceの科学であると語り、“He profits most who serves his fellows best.”と自身の職業観を表現したモットー（標語）を発表して多くの賛同者の拍手を得た。最初の綱領（Objects）発表、親睦を削除。

- ・1911年（第2回ポートランド大会）、シェルドンはペリーの代読でbusinessの科学はserviceの科学であると述べ、“He profits most who serves best.”と修正した標語を含む「私の宣言」を発表し、満場の拍手を得た（この標語は大会の「ロータリー宣言」の結語として採用され、その後は職業奉仕理念と解釈され、1950年に公式標語となっている）。

また、ミネアポリスRCのフランク・コリンズが大会の小旅行企画の船上で語った“Service, Not Self.”については後日機関誌で発表するとの付言があった。（ポール・ハリス）

- ・公式機関誌“The National Rotarian”（1911年1月号）が創刊され、Toleration”（寛容）を強調したポール・ハリスの論文“National Rotarianism”が掲載されている。

1911年11月号には“Service, Not Self.”が掲載されたが、この標語はその解釈について問題を抱えながら1920年に“Service Above Self.”と変更され（手続要覧）、人道的奉仕理念と考えられて1989年から第一標語となっている。（コリンズの論文をよく読むと、Not Selfは決して宗教倫理ベースではないことがわかる。）

- ・1912年（ドゥルース大会）、全米RC連合会は国際RC連合会（International Association of Rotary

Clubs）と改称（グレン・ミード会長）。「ロータリー宣言」の結語として“Service is the basis of all business.”が追加（スローガンと呼称）。親睦と相互扶助を目的から一掃するRC綱領に初めて“service”という語が出現した。

二つの標語は二つの奉仕理念とされ、宗教倫理派と実業倫理派によるロータリー理念の構築が熱烈に論議された歴史が続く。

- ・1915年（サンフランシスコ大会）、理論及び教育委員会（Committee on Philosophy and Education）のグレン・ミード委員長が委員会報告の中で、“Spirit of Rotary”（ロータリー精神）を二つの局面すなわちeconomic side（経済的側面）とaltruistic side（利他主義的側面）に分類して解説し、初めて“Ideal of service”という語を使用した。

それは、business生活において我々の仲間 high ideal of serviceを、そして人類全体にも与えられないだろうか、という語り口であった。

- ・1916年（シンシナティ大会）、グレン・ミードの後任者であるフィラデルフィアRCのガイ・ガンディカーは、前年度に採択された道徳律（Code of Ethics）を含むロータリー最初の教育書“A Talking Knowledge of Rotary”（ロータリー通解）を刊行し“Service, Not Self.”の立場でロータリー精神を解説した。

シェルドンの標語にある“profit”については、シェルドンの考えに反して優れたserviceをすることにに関して与えられた機会であると言明した。

- ・1918年（カンザスシティ大会）、連合会の綱領に初めて“ideal of SERVICE”という語が使われた。これによって、それまで“Spirit of Rotary”や“Unselfish slogan of Rotary”など様々な表現で語られてきたロータリーの基本理念を表す用語が正式に決定したといえる。

- ・1919年（ソルトレークシティ大会）、ジョン・ポール会長は、“Service, Not Self.”を初めて“Service Above Self.”と変えて演説し（これが“Service Above Self.”の初出?）、“He Profits…”と共にロータリアンの将来をより大きなusefulness（有用性）の世界に導くものであると表明した。（1912-18年においてはnot selfが使われていたが、above selfへの変遷が徐々に進んでいた。）

- ・1920年（アトランティックシティ大会）、手続要覧に正式にService Above Selfと表明された。F.コリンズが死去。

- ・1921年（エジンバラ大会）、シェルドンが「ロータリー哲学」というテーマで演説し、主に英国でのprofit反発に対する説明を行った。彼はprofitを徹

底して「利潤」としながらも、標語全体の意味はキリスト教理の黄金律（マタイ伝第7章第12節）と同じであると語って喝采を得た。（1913年のバッファロー大会でも同様の発言があった。）

この大会をもって“Service, Not Self.”はほぼ全般的に“Service Above Self.”と変更されたと考えられている。しかし、その後しばらくは“Service before self.”という語と共に語られていた記録も存在している。

なお、この年度の手続要覧に新たに Rotary Motto という項目が加わって、「He Profits —— が一般的にロータリーモットーとして使用されている。また“Service Above Self - He Profits Most Who Serves Best”という形式でも使われている」とある。

- ・1922年（ロサンゼルス大会）、連合会は国際ロータリー（Rotary International）と改称。ロータリークラブの連合組織体として確実なスタートを切った。
- ・1923年（セントルイス大会）、1915年あたりから急激に拡大した人道的奉仕活動（身体障害児協会）への批判と対立は紛糾し、その収束の努力が決議23-34号として結実した。

ここで、“Ideal of service”はロータリーの哲学・人生の哲学を表す用語とされ、二つの標語として確定した“He Profits…”と“Service Above Self.”がその実体を構成するものであると認識された。

- ・1927年、Aims and Object Plan Committee（目標設定委員会）は初めて四大奉仕部門を設定するプランを発表・採択した。その1931年版RI公式パンフレットの「職業奉仕」の部分で、次のような説明がある。（英語版p.24）

「ロータリーでは奉仕の理想（ideal of service）の意味について様々な表現がわかれた。『“Service Above Self”、“He Profits Most Who Serves Best”、“thoughtfulness of others”（他者への思いやり）、“most of all treating as one would like to be treated”（自分にして欲しいことを何よりもまず他者に与える）』がある。」

これが最初の正式な説明であり、当時のideal of serviceの解釈と考えてよい。黄金律が宗教的立場から離れてideal of serviceの根底に常に置かれている。（1918年に連合会の綱領に初めて登場して以来のideal of serviceがこのように説明された。）

- ・Ideal of Serviceは以上のような歴史を辿ってロータ

リーの基本理念として確定したが、その後1950年（デトロイト大会）にはその構成要素である二つの標語が正式にロータリーモットーとして採択された。

- ・1989年2月、規定審議会は“Service Above Self”を第一標語とする決議を行った（89-145）。“He Profits…”も引き続き公式標語として残すものである。日本最初の手続要覧日本語訳（1956年）には“He Profits…”を「最善奉仕最高応報」とある。2年後（1958年）からはほぼ現在の訳文となった。
- ・1984年から二つの標語を中心理念としている決議23-34の削除提案が度々提出されたが、その都度否決されている。時代変化を反映するものとは言え、ロータリーの哲学を表現したIdeal of Serviceを意味する「人生の哲学」を規定した23-34、特にその第一項目を削除することは決してあってはならないということが、2010年の規定審議会で改めて決議され、理事会も採択している（10-182）。

- ・かつて“Ideal of service”を説明する正式な文章はないと言われていたが、唯一、**2008年版までの Official Directory（公式名簿）**の巻末にチェス・ペリーによると言われる一文があった。そこには、the“ideal of Service,”which is thoughtfulness of and helpfulness to others とあり、これは1954年3月にオクラホマ州タルサRCでペリーが語ったものと思われる。

“他者に対して思いやりと手助けを”という表現はabove selfへ傾いた表現で、当時の傾向が表れている。なお、2009年版からは“ideal of Service Above Self”と作者不明のフレーズが載っている。

●結び

以上のように歴史的沿革を理解すれば、二つの標語はその軽重を論ずることなく同意義のものとしてワンセットで語られるべきことは明確であることがわかります。特に、“He Profits Most Who Serves Best.”が原点的出発であることは銘記すべきでしょう。（2010年から“One Profits Most Who Serves Best.”に変更された。）

理念なき行動は盲動となる危険をはらみます。実践法則は時代の変化につれて慎重に改変する必要があるが、ロータリーの基本理念Ideal of Serviceは決して変えてはならないものでしょう。

（引用文献：2710 地区 諏訪昭登PDG（広島西）ロータリー歴史に学ぶ1～3）